

チリの鮭の養殖（その三）

稲宮 健一

チリ産鮭の三回目である。この件はスーパーでチリ産の鮭をよく見かけたことから関心を持った。チリ産は抗生物質に汚染されているので、買わない方が良いとの巷の噂が頭に入っていた。さらに、かつて南半球に鮭はいなかったなどで、少し関連資料を調べた。

チリの鮭の養殖事業は一九七八年に最初の一步を踏み出した。順調に拡大発展し、二〇一四年のデータで、世界の養殖鮭の生産国はノルウェーが一位、チリが二位で、これで世界の七割を占め、そして、日本での消費量の四割がチリ産であった。その一方、二〇一六年の記事で、チリ南部で赤潮が広範囲に発生し、大量に鮭が死んだ。赤潮の原因はエルニョ現象によるという記事と、同時に養殖時使われ餌の管理の甘さや、死んだ鮭の海洋投棄も指摘されている。この赤潮対策に対して日本の広島大学とチリのラフロテラ大学等が共同でJSTの支援を受け、研究活動を現在も行っている。北海道でも今年の鮭の不漁は赤潮が原因と言われている。食の安全の観点から、現地事業者のニツスイに問い合わせたら、出荷前の養殖魚に残留薬剤検査を実施しており、基準値以下を確認し、薬剤残留がある場合は水揚げ不可の厳格な管理を行っているとのこと。農水省からは、海外の事情は不明だが、国内に入る所で厳格な検査を実施していると知らされた。

前二回に書いたように、このの始まりは一九七八年北海道の養殖技術がJICAの支援で、日本とチリの水産庁を通じて移転されたことによる。この参考文献の中に、二〇〇一年に日本で開かれたチリ経済シンポジウムでチリ側出席者の経済学者がサケ輸出の急拡大事情を発表した。しかし、鮭養殖の初期に日本の協力があつたことを知らなかった。これにショックを覚え、文献の著者はチリ養殖の事始めを著書に記述したとのこと。

我々も、十和田湖のマスから和井内貞行のこと、テレビを見ながら、高柳健次郎や、八木秀次のことを思い出す人はどのくらいいるだろうか。

参考文献：細野昭雄「南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち」ダイヤモンド社

二〇一〇年発行

JST：科学技術振興機構